

京城帝国大学文科助手会と会報『学海』

李 曉 辰

The ‘Assistants Association of the Department of Liberal Arts’ at Keijō Imperial University and Journal *Gakkai*

LEE Hyojin

In this paper, I will examine academic activities and the human network at Keijō Imperial University, focusing on the ‘Assistants Association of the Department of Liberal Arts’. This association was established in April 1934 by Nakayama Iwamitsu (中山岩光), Takeshita Teruhiko (竹下暉彦), Park Chi-woo (朴致祐), Shūda Tatsuo (習田達夫), Sano (佐野道), and Shōji (庄司秀一). They gathered 44 members in a year and a half. Most of the members had experience as assistants at Keijō Imperial University, and most of the assistants were graduates after 1929, when Keijō Imperial University started producing graduates. They held regular lectures more than 10 times between 1934 to 1935, and published the journal *Gakkai* twice in 1935. The two journals published contain 17 articles and three poems written by members of the association.

This association is important because it gives us a clue about how young Korean and Japan scholars communicated in that period, and helps us understand what the role of the assistant position in Imperial University was like.

キーワード：京城帝国大学 (Keijō Imperial University)、京城帝国大学文科助手会 (Assistants Association of the Department of Liberal Arts)、『学海』 (Journal *Gakkai*)、近代日韓学術 (Academism of modern Korea and Japan)

はじめに

本稿は、京城帝国大学における日韓研究者の学術活動と人的ネットワークを究明することを目的とする。特に、これまで注目されなかった文科関係の助教たちの研究活動に注目して考察したい。

1924年に帝国日本により韓国の京城（ソウル市）に予科が設置され、二年後の1926年に京城帝国大学が開校し、戦後まで韓国の最高学府として存在しつづけた。京城帝国大学は6番目に誕生し、外地として初めて建てられた帝国大学であった。これまで、植民地大学としての京城帝国大学の全体的理解、またはある専攻や教員に焦点を当てて分析する研究が多くなされてきた。京城帝国大学の学知が日本の官学アカデミズムと結んで運営された研究会および研究者に関する研究や、小倉進平・小田省吾・安倍能成など京城帝国大学の教員であった研究者たちに関する考察なども行なわれている。また、韓国人卒業生の進路や経験などを扱う研究はもとより、日本人卒業生に注目する研究まで考察の対象が広がり、京城帝大の卒業生に関してもかなりの程度明らかになりつつある。

しかし、ここで注目したいのは、京城帝国大学を構成していたもう一部の教員たち、すなわち「助手」のことである¹⁾。京城帝国大学は講座制を設け、各講座は各々一つの研究分野としての意味を持ち、担当教員はそれらの科目の研究の義務も付与されるのが一般的であった。そして必要に応じて、一つの講座に助教授や助手を置く場合もあった。京城帝国大学で行なわれた授業と担当教員については『京城帝国大学一覽』や『青丘学叢』などの資料から窺うことができるが、助手についてまではさほど紹介していない。ところが、助手たちも京城帝国大学において活発な研究活動を行っており、それらの成果を助手会の会報『学海』に発表していた。

そこで本稿では、これまで注目されなかった京城帝国大学の助手に焦点を当て、彼らの研究活動の分析を試みる。特に、京城帝国大学の助手として勤めていた多くの研究者が、京城帝国大学の卒業者であり、また戦後に日韓の大学で活動した人物だったことは注目すべき点である。また、文学部の助手の出身を検討し、京城帝国大学が輩出した卒業者が、どのぐらい京城帝国大学の助手となり、そのキャリアがどのように続いていったか探りたい。これは京城帝国大学における学術活動の一面を究明するものであり、これまで十分考察されていなかった、京城帝

1) 帝国大学助手に関する研究は、伊藤彰浩外『近代日本高等教育における助手制度の研究（高等教育研究叢書3）』（広島大学大学教育研究センター、1990年）、佐々木研一郎「東京帝国大学法学部助手に関する一考察」（『政治学研究論集』第34号、2011年）などがある。しかし、これらの研究はいわゆる外地の帝国大学、即ち京城帝国大学及び台北帝国代学についてはさほど注目していない。

国大学の助手たちの研究活動と人的ネットワークをかなりの程度明らかにできると考える。

1 京城帝国大学文科助手会の結成

帝国大学における助手は、教授・助教授と共に教員の一部を構成していた。帝国大学の助教制度に関する調査研究をまとめた『近代日本高等教育における助手制度の研究』（伊藤彰浩外、広島大学大学教育研究センター、1990年）によると、帝国大学官制においてはじめて法制上に助手の位置づけがなされたのは、1893年のことである。明治二十六年八月十一日に改定された帝国大学官制の第九條に「助手ハ判任トス教官ノ指揮ヲ承ケ學術技芸ニ関スル職務ニ服ス」²⁾と明記しているのがそれである。京城帝国大学官制（大正十五年三月勅令第四六号第一条及附則改定）の第八條には、「助手ハ各学部ニ分属シ教授又ハ助教授ノ指揮ヲ承ケ學術技芸ニ関スル職務ニ服ス」³⁾と助手を位置づけている。そして1926年の開校当時には法文学部に6人の助手⁴⁾を置き、翌年には12人まで増員した。それ以来、京城帝国大学法文学部の助手は平均15人前後の体制を維持し、最も多い時期は17人もいた。

このように帝国大学に助手を置くことは一般的なことであったが、京城帝国大学の助手たちがさらに新しい学術団体を結成し、研究活動と交流を図ったのは注目すべきである。助手会は1934年4月18日に初めて創設について相談し、約十日後第一回例会の開催を皮切りに活動を始めた。準備から結成までは当時助手として勤務していた人物、すなわち中山岩光、竹下暉彦、朴致祐、習田達夫、佐野道、庄司秀一の六人の主導によるものであった。そのうち習田と庄司が世話役として例会や会報の編集などを担当した⁵⁾。この初期メンバーはみな昭和八年または九年に京城帝国大学法文学部を卒業し、助手ポストに就いたという共通点がある。つまり、学部時代から交流を持った彼らとその親睦を活かして研究活動のできる場を創ろうとしたと考えられる。

助手会の結成の意図と目的については、会報『学海』の「はしがき」からうかがうことができる。

昭和九年四月に新たに成立した文科助手会の会則に従ひまして、茲に第一回の会報を發

2) 『東京帝国大学一覽』明治26-27年、東京帝国大学、18-21頁。

3) 『京城帝国大学予科一覽』京城帝国大学予科、大正15年、9頁。本規定は、昭和17年まで修正なしに存続した。

4) 植野武雄、園田庸次郎、(商学士) 渡植彦太郎、富山民藏、(文学士) 尹泰東、林原操。

5) 「彙報」『学海』第一輯、京城帝国大学法文学部内文科助手会、昭和十年(1935)1月、66頁。

行することになりました。最初のことでもあり、十分に原稿を集めることが出来なかったことを遺憾に思っています。然し乍ら会員諸子の熱意に依りまして、どうにか出版の運びに至ったことを窃に喜んで居る次第です。

文科とは申しますものゝ、実に多岐に亙って居りますので、統一が取れず、雑然たるものがあるのでありますが、此の種の会報と致しまして、これも止むを得ないことでせう。寧ろ会員相互の親睦及び知識の聯絡を図る意味から、会員諸君の全ゆる方面の研究を極端に専門的に互らない範囲内に於いて、披瀝し合った草稿を、集めたものとして見ればあながち無意味なものとはならないでせう。

尚ほ今回講演して戴く暇がなかった会員諸君からも、御多忙中にも拘はらず、玉稿を戴くことが出来たことは感謝に堪へません。而して次回の会報発行に際しては、かうした地方在住の会員諸子の御寄稿をより多く戴くことに依って、益々内容を充実して行きたいと考えて居ります。⁶⁾

以上の資料から京城帝国大学文科助手会は、1934年に「文科関係ノ学問ノ研究並ニ会員相互ノ親睦及び聯絡ヲ図ルヲ以テ目的」として組織されたことがわかる。京城帝国大学が「東洋学の権威」⁷⁾を標榜し、「学术研究の機関であり、同時に最高教育の機関」⁸⁾であることを強調したことを考えると、助手たちも新しい分野への研究を追求すべき義務を感じていたのだろう。そのため韓国で自分らの研究を発表し、交流する機会を求めていたと考えられる。以下の発言からそのような京城帝国大学の研究者としての抱負を読み取ることができる。

満州国へ、北支へ、と我が帝国の進展は一方我朝鮮の重要性の増大をきたすものとなって来る。つい先頃産声あげたと思はれた城大ももう十歳になる。それだけ我城大の価値も出来たのだ。一番手間のかかる人間の子供でも十歳になれば相当な事はするのだから、そろそろ活躍すべき時節ではないかと思ふ。満州へ、北支へ、我が城大の進む天地は広い。⁹⁾

ここに読み取れるように、開校から十年目を迎えた京城帝国大学の位相と重要性を感じ、そ

6) 「はしがき」『学海』第一輯、京城帝国大学法文学部内文科助手会、昭和十年（1935）1月、1頁。

7) 服部宇之吉「京城帝国大学始業式に於ける総長訓辞」『文教の朝鮮：京城帝国大学開学記念号』六、朝鮮教育会、1926年、3-4頁。

8) 松浦鎮次郎「第一回卒業式式辞」『京城帝国大学学報』第二五号、京城帝国大学庶務課、1929年4月。

9) 「編輯後記」『学海』第二輯、京城帝国大学法文学部内文科助手会、昭和十年（1935）12月、145頁。

の一員としての誇りや役割を認識していたのである。

助手会の運営については『学海』第一輯の「京城帝国大学文科助手会会則」にその全般が記録されている。

◎第一章 総 則

第一條 本会ハ京城帝国大学文科助手会ト称ス

第二條 本会ハ文科関係ノ学問ノ研究並ニ会員相互ノ親睦及ビ聯絡ヲ図ルヲ以テ目的トス

第三條 本会ノ事務所ヲ京城帝国大学文学部内ニ置ク（但シ幹事ノ属スル研究室ヲ以テ事務所トス）

◎第二章 事 業

第四條 本会ハ其ノ目的遂行ノタメ左ノ事業ヲ行フ

- 一、支障ナキ限り毎学期二回例会ヲ開キ会員又ハ賛助会員ノ講演ヲ行フ
- 二、年一回以上会報ヲ発行ス
- 三、其他本会ノ目的達成ノタメ必要ト認メタル事業

◎第三章 会 員

第五條 本会ハ左ノ会員ヲ以テ組織ス

- 一、普通会员
文科関係助手副手たる者
- 二、賛助会員
嘗テ文科関係ノ助手副手タリシ者

第六條 会員ハ会員名簿ニ登録ス

◎第四章 役 員

第七條 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、幹事二名ヲ置キ任期ハ滿一箇年トス
- 二、幹事ハ普通会员中ヨリ互選ス
- 三、幹事ハ本会ノ事務ヲ掌ル
- 四、幹事ハ任意ニ臨時会合ヲ開ク事ヲ得

◎第五章 会 計

第八條 会員ハ左ノ如ク会費ヲ納入スルモノトス

- 一、普通会员ハ毎月五十銭

二、賛助会員八年一圓五十銭

第九條 本会ノ資金ハ会費、寄付金、其他ノ収入ニ依テ之ニ充ス

第十條 会計ハ毎年三月之ヲ会員ニ報告ス

◎第六章 雑 則

第十一條 本会則ノ変更ハ普通会員過半数ノ賛成ヲ得テ之ヲ決議ス

第十二條 本会則ハ昭和九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

助手会は毎学期二回の例会や講演会を開き、さらに少なくとも年に一回以上会報を発行することを目指した。幹事が属している研究室を事務室として活用し、会員からの会費や寄付金などで財政をまかなった。助手会は1934年4月の発足以来4回の例会を持ち、1935年1月に発行した『学海』第一輯を山田総長に手渡すなど、意欲的に活動を行なった。会員も1935年に『学海』第二輯を発行する際には44人まで増えていた。

会員は京城帝国大学文科関係の助手・副手の普通会員と、かつて文科関係の助手・副手だった賛助会員により構成された。特に、教授と助教授の大部分が日本内地出身の日本人学者であるのに比べ、助手には韓国人の京城帝国大学卒業生も少なからず参加していた。たとえば、美学・美術史専攻の高裕燮（1905-1944）、史学科の柳洪烈（1911-1995）、心理学専攻の李鎮淑（1908-1962）などが京城帝国大学文科助手会メンバーとして活動した。後述するが、京城帝国大学文科助手会出身で戦後の日韓両国の研究者として活躍した人物も多い。

2 京城帝国大学法文学部内文科助手会の会員と京城帝国大学でのキャリア

帝国大学における助手ポストは一般的に帝大教授に至るアカデミック・キャリアのためのエスカレーターとも考えられた¹⁰⁾。では、京城帝国大学の場合はどうだったのだろうか。

『学海』第二輯の末尾には、「彙報」、「会員動静」、「編輯後記」が載っている。ここでの情報を基礎として京城帝国大学法文学部内文科助手会に参加した人物とその具体的活動をうかがうことができる。本稿では「会員動静」に現われている情報に加え、彼らの京城帝国大学におけるキャリアを『京城帝国大学一覽』（昭和二年～昭和十七年）から抜粋してみた。整理すると【表1】のようになる。

10) 岩田弘三「帝大助手のキャリア」伊藤彰浩外『近代日本高等教育における助手制度の研究』（高等教育研究叢書3）、広島大学大学教育研究センター、1990年、28-29頁。

【表1】 京城帝国大学法文学部内文科助手会の会員と京城帝国大学におけるキャリア

会員名	会員動静（昭和十年十二月当時）	京城帝国大学でのキャリア ¹¹⁾
尹 泰東	間島省学務課	助手（1926年～1928年／1929年*） 予科助教授（1929年／1930年*～1933年） 予科教授（1934年）
植野武雄	奉天満鉄図書館	助手（1926年～1929年）
福（富）山民藏	京城中学校	助手（1927年～1929年）
鎌塚 扶	本府学務局編輯課	助手（1929年、1930年*）
天野利武	本学心理学研究室	助手（1927年／1928年*～1929年*／1930年） 心理学講師（1931・32・33年*／1934年～1935年） 助教授（1936年～1938年） 教授（1939年～1941年／1942・43年*）
林原 操	龍山中学校	助手（1926年／1927年*～1929年）
金 志淵	本府警務局図書課	助手（1927年／1928年*～1929年）
渡邊 一	東京植野公園内美術研究所	助手（1929年）
園田庸次郎	本府朝鮮史編修会	助手（1926年／1927年*～1930年）
中澤希男	京城帝国大学予科	支那語学、支那文学専攻（1929年3月卒業） 助手（1930年） 予科教授（1935年～1942年／1943年*）
権 世元	京城府益善洞一六六の五	哲学、哲学史専攻（1929年3月卒業） 助手（1929年～1930年）
道（趙）潤濟	京城師範学校	朝鮮語学、朝鮮文学専攻（1929年3月卒業） 嘱託*（1929年*） 助手（1930年～1931年）
裴 相河	京城薬学専門学校	哲学、哲学史専攻（1929年3月卒業）
小松鳳三	本府法務局行刑課	心理学専攻（1930年3月卒業） 助手（1931年～1932年）
高 裕燮	開城博物館	美学、美術史専攻（1930年3月卒業） 助手（1930年～1932年）
金 容河	大邱師範学校	法文学部選科生 哲学科入学（1926年） 助手（1930年）
徐 斗鉢	嶺南浦商工学校	国語学、国文学専攻（1930年3月卒業）
須藤栄雄	京城帝大予科	国語学、国文学専攻（1930年3月卒業） 助手（1930年～1931年） 予科講師（1935年～1936年） 予科教授（1937年～1942年／1943年*）

11) 『京城帝国大学一覧』は年一回のみ発行されたので、精確な在職期間を知るには不十分である。そのため、韓国史データベース（<http://db.history.go.kr/>）の職員録資料と比較しながら在職期間を表記した。後期になるほど『一覧』と職員録資料がほぼ一致しているが、初期の何年間はややずれている。このように『一覧』と職員録資料の間ズレがある場合、職員録資料の記録に*印を付けて区分した。

寺本喜一	京城第一高等女学校	英吉利語学、英吉利文学専攻（1930年3月卒業） 助手（1930年～1931年）
権 稷周	平壤高等普通学校	倫理学専攻（1931年3月卒業） 助手（1931年～1932年）
田中一郎	光州中学校	支那哲学専攻（1931年3月卒業） 助手（1931年～1932年）
巖 武鉉	間島光明高等女学校	東洋史学専攻（1931年3月卒業） 助手（1931年）
田川孝三	本府朝鮮史編修会	朝鮮史学専攻（1931年3月卒業） 助手（1931年～1932年）
西川 融	京城第二高等普通学校	英吉利語学、英吉利文学専攻（1931年3月卒業）
生沼逸郎	仁川府寺町一一ノ二	哲学、哲学史専攻（1932年3月卒業） 助手（1934年）
金 鐘武	海州高等普通学校	東洋史学専攻（1932年3月卒業）
松尾元治	東星商業学校	朝鮮史学専攻（1931年3月卒業）
杉本長夫	京城法学専門学校	英吉利語学、英吉利文学専攻（1932年3月卒業） 助手（1932年～1933年）
渡部 保	大邱師範学校	国語学、国文学専攻（1932年3月卒業） 助手（1932年～1933年）
中山岩光	全南光州小学校	教育学専攻（1933年3月卒業） 助手（1933年～1934年）
朴 鐘鴻	本学哲学研究室	哲学、哲学史専攻（1933年3月卒業） 助手（1936年）
朴 致祐	平壤崇専門学校	哲学、哲学史専攻（1933年3月卒業） 助手（1933年～1934年）
李 鎮淑	日本ビクター蓄音機株式会社 京城支店	心理学専攻（1933年3月卒業） 助手（1933年～1935年）
習田達夫	本学美学考古学研究室	法文学部選科生 哲学科入学（1934年） 助手（1934年～1935年）
竹下暉彦	本学内満蒙文化研究会	東洋史学専攻（1933年3月卒業） 助手（1933年～1934年）
兵頭 正	京城女子師範学校	国史学専攻（1933年3月卒業）
広戸 惇	裡里農林学校	国語学、国文学専攻（1933年3月卒業）
安川圭一郎	本学国文学研究室	国語学、国文学専攻（1933年3月卒業） 助手（1935年）
庄司秀一	本学支那哲文学研究室	支那哲学専攻（1934年3月卒業） 助手（1934年～1936年）
佐野 道	小倉市外野戦重砲第六聯隊 第五中隊	国語学、国文学専攻（1934年3月卒業） 助手（1936年～1938年）

李 皓根	本学英文学研究室	英吉利語学、英吉利文学専攻（1934年3月卒業） 助手（1935年）
有賀文夫	本学倫理教育研究室	哲学、哲学史専攻（1935年3月卒業） 助手（1938年～1939年）
江田 忠	本学東洋史研究室	東洋史学専攻（1935年3月卒業） 助手（1935年）
柳 洪烈	本学社会学宗教学研究室	朝鮮史学専攻（1935年3月卒業） 助手（1935年～1936年）

この表から全会員が京城帝国大学の助手または卒業生だったことがわかる。44名の会員のうち裴相河、徐斗銖、金鐘武、松尾元治、兵頭正、広戸惇の6名を除き、38人が助手としての経歴を有している。会則に「二、賛助会員 嘗テ文科関係ノ助手副手タリシ者」となっていることから考えると、この6名は副手だったと思われる。有賀文夫のみ『学海』の発行の後助手職に就任したが、すでに勤務先が「本学倫理教育研究室」となっていることから、卒業と同時に副手として倫理教育研究室に配属されたと考えられる。44名の中で京城帝国大学の卒業生ではない人物は計9名で、全員京城帝国大学が卒業者を輩出する前に助手として赴任した者であった。

会員は韓国人16名¹²⁾、日本人28名で日本人の会員が多いが、京城帝国大学の韓国人と日本人の比率¹³⁾や、教授全員が日本人だったことを考量すると韓国人が少ないとは言い難い。実際に教授と助教授に比べ、助手職には韓国人教員の割合が比較的に高かった。昭和二年から昭和十年までの『京城帝国大学一覽』に登載されている助手を挙げると以下のようである。助手会のメンバーには下線を引いた。

昭和2年（6人） 植野武雄、園田庸次郎、（商学士）渡植彦太郎、富山民藏、（文学士）尹泰東、林原操

昭和3年（12人） 植野武雄、園田庸次郎、（商学士）渡植彦太郎、富山民藏、（文学士）尹泰東、（文学士）天野利武、（法学士）森谷克己、（法学士）李愚昌、金

12) 裴相河、徐斗銖、趙潤濟、權稷周、高裕燮などは雑誌『新興』のメンバーでもあった。徐斗銖、趙潤濟らは朝鮮語文学会の初期メンバーとして活動した。

13) 卒業生は1929年（昭和四年）から1942年（昭和十七年）までで日本人1219名と韓国人727名の、合計1946名であった。日本人と韓国人の比率はほぼ2：1である（『京城帝国大学一覽』京城帝国大学、1943年、283頁）。

- 志淵、(法学士) 木沢建郎、林原操、圓城寺勳
- 昭和4年(16人) 植野武雄、園田庸次郎、鎌塚扶、富山民藏、(文学士) 天野利武、(法学士) 李愚昌、桜井義之、(商学士) 金洸鎮、(文学士) 渡部一、(法学士) 兪鎮午、(文学士) 權世元、金志淵、(法学士) 木沢建郎、林原操、圓城寺勳、張之兌
- 昭和5年(17人) 園田庸次郎、(文学士) 天野利武、桜井義之、(法学士) 兪鎮午、(文学士) 權世元、(文学士) 中澤希男、(文学士) 趙潤濟、(法学士) 崔容達、(文学士) 高裕燮、(法学士) 李康国、(法学士) 朴文圭、(文学士) 寺本喜一、(法学士) 岩崎二郎、(文学士) 須藤榮雄、圓城寺勳、張之兌、金容河
- 昭和6年(17人) 桜井義之、(法学士) 兪鎮午、(文学士) 趙潤濟、(法学士) 崔容達、(文学士) 高裕燮、(法学士) 李康国、(法学士) 朴文圭、(文学士) 寺本喜一、(文学士) 須藤榮雄、(文学士) 小松鳳三、(文学士) 申南澈、(文学士) 權稷周、(文学士) 田川孝三、(文学士) 田中一郎、(文学士) 嚴武鉉、圓城寺勳、張之兌
- 昭和7年(15人) 桜井義之、(法学士) 兪鎮午、(文学士) 高裕燮、(法学士) 朴文圭、(文学士) 小松鳳三、(文学士) 權稷周、(文学士) 申南澈、(文学士) 田川孝三、(文学士) 田中一郎、(文学士) 渡部保、(文学士) 杉本長夫、(法学士) 朴元善、(法学士) 相内俊雄、圓城寺勳、張之兌
- 昭和8年(16人) 桜井義之、圓城寺勳、張之兌、(文学士) 渡部保、(文学士) 杉本長夫、(法学士) 朴元善、(法学士) 相内俊雄、(法学士) 奧徹、(文学士) 竹下暉彦、(文学士) 中山岩光、(文学士) 李鎮淑、(文学士) 金文卿、(法学士) 裴延鉉、(文学士) 朴致祐、(法学士) 李明新、(法学士) 申基碩
- 昭和9年(15人) 桜井義之、圓城寺勳、張之兌、(法学士) 相内俊雄、(文学士) 竹下暉彦、(文学士) 中山岩光、(文学士) 李鎮淑、(法学士) 裴延鉉、(文学士) 朴致祐、(法学士) 申基碩、(法学士) 栗岡武、(文学士) 庄司秀一、習田達夫、(文学士) 生沼逸郎、今関光夫
- 昭和10年(15人) 桜井義之、圓城寺勳、張之兌、今関光夫、(法学士) 相内俊雄、(文学士) 李鎮淑、(法学士) 申基碩、(法学士) 栗岡武、(文学士) 庄司秀一、習田達夫、(文学士) 李皓根、(文学士) 安川圭一郎、(法学士) 隈部光、(文学士) 江田忠、(文学士) 柳洪烈

ここから、韓国人助手を他のポストに比べて比較的多く採用していたことがわかる。また、法学士を除いた助手の過半数以上が助手会の会員になっていたことも確認できる。韓国と日本両国の若手学者がこのように集まって学術交流を行なう機会はさほど一般的な風景ではなかっただろう。ここに京城帝国大学助手会がもつ学術史的意義があると思う。

一般に帝国大学の文学部助手は以後、同帝国大学の教授、旧制高校・高等師範学校の教員、官僚などになった¹⁴⁾。前述したように、帝国大学卒業—同大学助手—同大学助教授—同大学教授となるパターンはごく一般的なルートであった¹⁵⁾。しかし京城帝国大学の場合、助手出身で助教授を経て教授になった人物は東京帝国大学の出身である天野利武¹⁶⁾のみであった。尹泰東、中澤希男、須藤栄雄など一部は助手を経て予科教授となった。その他の助手は「会員動静」によれば助手ポストの後にはおおむね師範学校や中学校などの教員として活動していた。このような違いは、京城帝国大学の歴史の短さにその原因があると考えられる。二十年ほどの期間では、卒業者を輩出し教授となる一連の過程を作るは至らなかったであろう。しかし、ソウル大学の学長となった趙潤濟（1904～1976）、ソウル大学の教授となった李鎮淑（1908～1962）、東京大学の教授となった田川孝三（1909～1988）などの例から京城帝国大学での助手キャリアが以後のアカデミック・キャリアへの踏み台になったといえよう。

3 例会と会報『学海』

「会則」に毎学期2回例会を開くとあり、1934年には4回開催し、1935年には6回までその回数が増えた。例会の場所は主に昭五食堂という大学食堂だった。一度の例会では最小5人から最大11人の会員が参加し、次のような手順で行なわれた。

- 一、 趣旨説明
- 二、 規約検討
- 三、 幹事選挙
- 四、 講演
- 五、 茶話
- 六、 次回講演者指定

14) 岩田弘三「帝大助手のキャリア」伊藤彰浩外『近代日本高等教育における助手制度の研究』（高等教育研究叢書3）、広島大学大学教育研究センター、1990年、33-24頁。

15) 前出、岩田弘三「帝大助手のキャリア」、49頁。

16) 天野利武（1904～1980）は「心理学第一講座」を担当した速水滉教授との縁で1927年京城帝国大学に赴任した。戦後には立命館大学教授、大阪大学教授、追手門学院大学学院長・学長として活躍した。

時間は一時間半程度の講演と、その後茶話で質疑応答が自由に行なわれた。会員の移動がある際には送別会や歓迎会も開かれた。例会は研究の目的だけではなく、会員相互の親睦と連絡の役割を果たしていたのである。『学海』の「彙報」には例会の日時や開催場所、講演者などの情報を詳しく載せている。『学海』第二輯にはさらに参加者名まで紹介し、全貌をより明確に確認することができる。これらの内容をまとめると【表2】のようになる。

【表2】 京城帝国大学助手会の例会の概観

日時	講演者	講演テーマ	参加者
第一回例会 (1934年) 4/28 (土)	習田達夫	「江戸版画のイデオロギー」	不明
第二回例会 6/6 (水)	中山岩光	「ナチスの教育と国民教育」	不明
第三回例会 9/20 (木)	李鎮淑	「子供の世界」	不明
第四回例会 11/5 (月)	杉本長夫	「詩の韻律的發展について」	不明
1935年1月15日	『学海』第一輯発行		
第五回例会 (1935年) 2/4 (月)	須藤 ^{ママ} 松雄	「文学研究の二つの立場」	須藤、寺本、 安川、李、 習田、庄司
第六回例会 3/6 (水)	生沼逸郎	「現代生活に於ける宗教的意義」	生沼、朴、李、 須藤、安川、 習田、竹下、 李(鎮)、庄司
第七回例会 5/1 (水)	寺本喜一	「ローレンスの発賣禁止小説に就いて」	中沢、天野、 杉本、庄司、 江田
第八回例会 6/18 (火)	朴鍾鴻	「現代歴史哲学の変遷について」	朴、天野、 習田、須藤、 寺本、權、李、 庄司、江田
第九回例会 9/28 (土)		親睦の雅会	天野、富山、 中澤、杉本、 朴、李、習田、 庄司、有賀、 柳、江田
第十回例会 10/29 (火)	庄司秀一	「支那上代の謡諺に就いて」	富山、習田、 有賀、柳、朴、 庄司、江田、 学生二人
1935年12月	『学海』第二輯発行		

発表者は1934年から1935年の間に助手として在職した人が多いが、参加者には当時予科教授の須藤栄雄、中澤希男および法文学部講師であった天野利武の名も見える。また第十回の例会には学生も2名参加した。1934年発表者の全員が例会講演後『学海』第一輯に論文を発表し、1935年発表者のうち朴鍾鴻を除く4名が『学海』第二輯に論文を発表している。

前出の「会則」には年一回以上会報も発行すると記録しているが、「編輯後記」では「少くとも年二回位は発刊」¹⁷⁾する意欲を見せ、結果的に『学海』を1935年1月と12月にそれぞれ発行した。

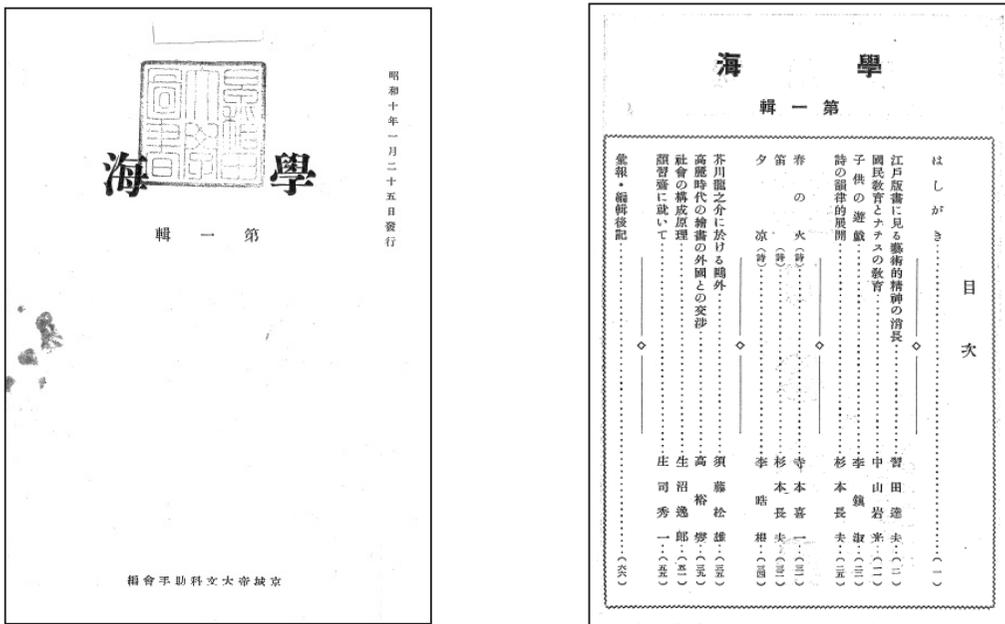


図1 『学海』第一輯の表紙(左)と目次(右)

会報『学海』は、第一輯に8点の論文が掲載され、第二輯に9点の論文が掲載されている。その内容は、文学から哲学、美術に及んでおり多様であった。目次は以下のとおりである。

『学海』第一輯 目次

はしがき 1頁

習田達夫「江戸版畫に見る芸術的精神の消長」2-10頁

17) 「編輯後記」『学海』第一輯、京城帝国大学法文学部内文科助手会、昭和十年(1935)1月、66頁。

- 中山岩光「国民教育とナチスの教育」11-21頁
 李 鎮淑「子供と遊戯」22-24頁
 杉本長夫「詩の韻律的展開について」25-30頁
 寺本喜一「春の火」(詩) 31頁
 杉本長夫「箱」(詩) 32-33頁
 李 皓根「夕涼」(詩) 34頁
 須藤松雄「芥川竜之介に於ける鷗外」35-38頁
 高 裕燮「高麗時代の絵画の外国との交渉」39-50頁
 生沼逸郎「社会の構成原理」51-54頁
 庄司秀一「顔習斎に就きて」55-65頁
 彙報・編輯後期 66-67頁
 (編輯兼発行者 庄司秀一)

『学海』第二輯 目次

- 須藤松雄「文学研究の二つの立場」1-6頁
 生沼逸郎「現代生活に於ける宗教的意義」7-13頁
 寺本喜一「Lady Chatterley's Lover (Lawrence) 研究」14-35頁
 庄司秀一「支那上代の謡諺に就いて」36-71頁
 植野武雄「満州地方志考」72-87頁
 高 裕燮「朝鮮の塼塔について」88-95頁
 習田達夫「日本の上代とその仏像」96-108頁
 柳 洪烈「高麗の元への服属と貢女」109-127頁
 江田 忠「Pearls, Buckの「大地」を読む」128-143頁
 彙報・編輯後期 144-145頁
 (編輯兼発行者 江田 忠)

この目次からわかるように、第一輯から第二輯へはほぼ二倍以上の量的発展があり、満州や開城など遠方からの投稿もあった。編集者の江田もこのような発展に喜びを表わしている。しかし、このような発展速度や周りからの関心にもかかわらず『学海』第二輯以降、助手会の活動は見られず、会報も発行されることはなかった。これは、六人の創設メンバー(中山岩光、竹下暉彦、朴致祐、習田達夫、佐野道、庄司秀一)のうち、佐野道を除く5名が1936年前後に

助手職の任期を終え、京城帝国大学を離れたことに原因があると考えられる。その結果、助手会運営や会報の発行などの求心点を失い、自然消滅したのではあるまいか。

『学海』第一輯の「はしがき」で明らかにしているように、例会と会報は「寧ろ会員相互の親睦及び知識の聯絡を図る意味」をもっていた。京城帝国大学文科助手会と雑誌『学海』は、朝鮮における帝国大学大学という新しい環境で、若手研究者たちが自分らの交流と研究発表の場として設けた研究組織だったと考えられる。

おわりに

本稿では京城帝国大学文科助手会について紹介し、助手会の具体的活動を例会や会報『学海』を中心に検討した。また、京城帝国大学文科助手会の活動とメンバーを知る資料『学海』第一輯と第二輯を分析し、彼等の京城帝国大学におけるキャリアについても探った。

助手会は意欲的に活動を行ない、二年余りの期間で例会を10回開き、学報『学海』を二冊発行した。例会の発表者は計9人で、論文の数は17篇にのぼる。研究のみならず、転勤や就職などを祝う親睦と連絡の会としての機能も果たした。当時様々な研究組織が存在したが、当時このように日韓研究者が私的に学術交流を行なえる場はさほど多くなかったであろう。この人的ネットワークは、京城帝国大学在職中だけでなく、その後にも日本と韓国そして満州をわたって繋がって行ったのである。

帝国大学の助手ポストは、教授に至るまでのキャリアの一つであった。実際に、尹泰東、中澤希男、須藤栄雄のように助手を経て予科教授に、初期の助手から始め教授になった天野利武などの例からそれを確認することができる。京城帝国大学の助手は歴史的な特殊性のゆえ、同大学の教授を出すまでには至らなかったが、助手出身のなかでは、戦後ソウル大学の学長となった趙潤濟、同大学教授の李鎮淑、東京大学の教授となった田川孝三など、大学の教授と研究者として活発に活動した人物が多いことからアカデミック・キャリアのための階梯としての役割を果たしたと考えられる。これは、開校初期もっぱら日本から教授を招聘した初期の京城帝国大学を考えれば、本校出身の教員を輩出する準備が整っていく学術的な成熟過程を示唆すると考えられる。

本稿では京城帝国大学助手会の全般について紹介したため、各会員の韓国における活動およびその後の活動については今後の課題としておきたい。これらについて分析することで京城帝国大学の助手たちの研究活動や人的ネットワークを明らかにできるであろう。